

## 古楽復活(抜粋)

●技術の熟達が、今日あまりにも高く評価されすぎているようだが、数年前の古楽界では、それがひどく軽視されていた事実も忘れない方がよい。

憂慮すべき事態は、新進の音楽家たちが自分自身の発想や個性を開拓するのではなく、成功した演奏家を真似る傾向である。

善意の「オーセンティック」な演奏にはまったく飽き飽きした。そういう演奏は複付点のリズムもひとつひとつ正確に刻むだろうが、激しい感情、戯れ、あるいはまったくの無軌道ぶりのかけらも伝えはしない。私は過去の「偉大な」作曲家たちにとっても深い尊敬を抱いているが、盲目的な敬意はいささかも持っていない。——とどのつまり、彼らも生活をしてきた生身も人間であって、聖職者だったわけではない——

●作曲家が考えた演奏の方法や様式は、彼が作曲した音楽全体の枠組みと全く不可分な関係にあり、したがって、現代において演奏しようとする際に、作曲家が心に描いていた響きを少なくとも心に留めておかないと、作品の説得力と効果はひどく損なわれることになる。

(演奏様式と楽器の響きは作曲家の創作の本質的な要素なのであり、音符と同じく、その音楽を正しく理解するために不可欠なのである。)

●「古い時代の演奏者や聴衆が愛した音楽のすべての特徴は、当時の人々がよく耳にし、高く評価していたような響きと分かち難いほど密接に関わっていた。もしこの響きを、典型的なモダン楽器の響きとその演奏で置き代えらるとするならば、われわれは、もともとの響きが伝えるはずの音楽的メッセージを捏造することになる。したがって、音楽はすべて、作曲者がその当時の人々に与えた時に用いた表現手段で演奏されるべきである。」

「われわれの精神は過去の人々のそれと同一でない。それ故、彼らの音楽を、技術上完璧に復元したとしても、当時の人々が感じ取ったと全く同じにわれわれが感じ取るということとは絶対に有りえない。われわれには、過去の事物や行為から現在の世界を隔てるバリケードを取り壊すことはできない。(楽譜という)記号とその原型を絶対的に一致させることはできないのである。」

●「バッハをハープシコードやヴィオールやリコーダーで演奏しても構わないが、もしハープシコードがリストのスタイルで弾かれ、ヴィオールがシュポーアやロードのような技術で弾かれたら、その結果に誰も納得しないだろう。正しい楽器を使えばそれだけで正しい、すなわち音楽的に良い演奏が保証されるわけではない。」

「古楽器を使いさえすれば昔の作品を歴史的に忠実に解釈できるという信仰は、古楽の単なる「物質的」な側面を過大評価するものである。演奏方法が同じく記譜の忠実な解釈によって裏付けられなければ、復興の試みはきっとバランスを欠いた一面的なものに終わってしまう。」

「楽器は非常に重要である。なぜなら楽器も様式の一側面であるからだ。正しい楽器も間違った音楽家ではよく鳴りはしない。バロック楽器を使っても下手な演奏ならば、モダン楽器を使った素晴らしい演奏の方が、実際はずっとオーセンティックであるかも知れない。素晴らしい演奏家の手腕もまた、様式の一側面であるからだ。」

●歴史的楽器こそオーセンティックな演奏の鍵であり、モダン楽器ではロマン派以前の音楽を当時の様式で演奏できない、という主張は正しくない。一般的に古楽器の方が昔の作曲家たちが思い描いた音をより簡単に作り出せるということである。どんな時代の音楽にもかまわず適用されていた一般的なスタイルは、今日では当然眉をひそめられる。

●歴史を意識した演奏への傾向は、音楽学的な正しさと少なくとも同じくらい、今の時代の風潮や流行に預かっているのかもしれない。音楽家の中には美学的判断を下すのを避け、「音楽学の合理的解釈という煙幕」の背後に逃げ込んでしまう者が多い。創造と解釈の双方で、何が良いのかが直感的にわからなければなるほど、外在的、歴史的、科学的証拠にますます熱狂的に依存するようになるからである。

●歴史的洞察は今日の古楽音楽家だけが独占しているのではない。古楽演奏家たちが演奏習慣を科学的原則と早まっさとらえてしまい、ただデータを集めれば探している答えが見つかると思い込んでしまう危険もある。

オーセンティシティが、「タイムトラベル的郷愁」以上のものを意味するとすれば、演奏家は歴史的演奏習慣に関する自分たちの不完全な知識の間隙を埋めるために「想像力による跳躍」を進んでしなければならない。

歴史的証拠があまりにも乏しく、また決定的でないからである。用心深い音楽家なら恐れ

て踏み込まないところに、あえてとび込まざるを得ない。

大胆な推測、想像力、学問、信念、知性に基づく直観的で創意に富む演奏。

「歴史的演奏のもっとも良いところは、それが演奏家に選択の自由、つまり多様な「正しい」演奏法を与え得ることである。歴史的演奏習慣は、規律と誠意ある解釈過程を独力で創造し、また一貫した様式の範囲内で個人の自由を発揮する機会を与えてくれる。」

「われわれは作曲家自身よりも、心配し過ぎたり、正統的であり過ぎたり、純粹過ぎたり、変わったことを恐がり過ぎているのではないだろうか」

●歴史的楽器が、現代の大コンサートの演奏では覆い隠されるか全く消え失せてしまっている音楽的特質を引き出している事実を誰も否定できないだろう。熟練した演奏家の手にかかる、ハープシコードの繊細な輝きがバッハやクーランに向いているのと同じくらい、フォルテピアノの明快なアーティキュレーション、安定した音域および倍音の豊かな響きが、モーツァルトやシューベルトに「ぴったり」合うように思われる。

●歴史的演奏運動は、専門を持たない演奏家が演奏できるレパートリーの範囲を狭めてしまったという点で、その影響は音楽解釈のアプローチの多様性を信じている人から当然激しい非難を受けた。他方、歴史的演奏はよりバランスの良い、より一貫性のあるプログラムづくりを進めることで、主流音楽においてははっきりした力となってきた。

まとまりのない総花的なプログラム、手当たり次第プログラムに取り上げる折衷主義は、いかなる時代の音楽も適切な歴史的文脈の中で初めて十分に評価され得る。

●過去のつまみ食い

●188年以降、音楽の歴史的な仕事は、忘れ去られた伝統を再構築することよりも、むしろ、既にある伝統を修正する仕事である。(修正主義的精神)

●歴史的演奏という教義には本来、年代の境界がない。それは音楽の実体ではなく、音楽作りの哲学を意味しているからである。

やがて、古楽演奏家が珍しくなくなり、歴史的演奏ということだけで注意を引くこともなくなり、音楽家が様々な時代の楽器を様々な音楽様式で扱うことができるようになり、現

在歴史的演奏といわれている演奏も、自由に選ぶことのできる多くの音楽解釈のひとつとなるときが来るであろう。そして、古楽という限定的なカテゴリーを必要としなくなる時が来るであろう。